

『風が吹くとき』(日本語吹替版)

原作・脚本: レイモンド・ブリッグズ

主題歌: デヴィッド・ボウイ「When The Wind Blows」

音楽: ロジャー・ウォーターズ

日本語吹替版監督: 大島渚

日本語吹替版キャスト: 森繁久彌、加藤治子

1986年/イギリス/85分



予告

Amazon Prime Video ほか、配信中
©MCMLXXXVI

社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

イギリスの片田舎で平穏な老後生活を送る夫妻ジムとヒルダ。しかしある日ラジオから流れてきた言葉で一変する。「国際情勢が急速に悪化しており、2〜3日以内にも戦争が勃発するもようです」と。しかもこれまでに二人が経験した戦争と違う。核兵器が使われる可能性が高い。

ジムは大慌てで、ある冊子を取り出す。州議会が発行している『世帯主は必読。生き残る方法』というパンフレットだ。その内容に従い、家の中にシェルターをつくり、戦争に備える。具体的には、ドアを取り外して壁に立てかけ、そのドアをクッションで押さえるというもの。ドアの下の間隙が避難スペースだ。そのわずかな空間にもち込むようパンフレットが指示するのは、到底入りきらない量の非常食や消毒液など。さらに指示通り、放射能を防ぐという白のペンキで窓を塗り、爆弾が落ちる直前にかぶるための大型紙袋を用意する。どれも冗談みたいな内容で笑ってしまうが、ジムは「役所の権威あるパンフだ」と1ミリも疑わず、せっせと準備を進める。ちなみにこれは実際、イギリス政府が1970年代に配布していた内容だそうだ。

ある程度準備が整った矢先、核爆弾が投下される。夫妻の家も爆風により壁や窓のあちこちが壊れ、家の中も散乱した状態に。幸い二人は怪我もなく生き延びる。しかしここから二人の「見えない」闘いが始まる。片田舎の二人の家の周りにほかに

40年前の作品が鳴らす警鐘 「過去」から変われているか

アーヤ藍

住んでいる人はおらず、電気も止まりテレビもラジオも反応しない。どれくらいの被害が起きたのか、政府は機能しているのか、全くわからないのだ。原爆を知る私たちは壊滅的な状態になっているだろうと想像が及ぶが、二人は「救急隊がもうすぐ来るだろう」「保険で補償されるから大丈夫だ」などと政府を、そして自分たちの明日を信じて疑わない。そんな二人を次第に「見えない放射能」がむしばみ始める……。

正常性バイアスのもと楽観的でありつづけようとする二人の姿に加え、怖いのは二人が「先の大戦」を楽しそうに懐かしんでいることだ。昔の方がわかりやすい構図だった。庭につくった避難所が花に覆われてきれいだった。アメリカ兵がガムやチョコをくれてうれしかったと。戦勝国ゆえか、情報統制や教育の影響なのか、戦時下さえ非日常の思い出として美化して語る二人の会話に心がざわざわする。

戦後80年の報道が増える時期。私たちは「楽しく懐かしむ」とまではいかないものの、本当にその痛みを、苦しみを、想像できているだろうか。この作品を観てジムとヒルダを滑稽だと笑い飛ばせるだろうか。本作の原作は米ソの軍拡競争が激しかった1982年に書かれ、50万部を超える大ベストセラーになったという。だが今の私たちこそ耳を傾けるべき警鐘に感じられる。



アーヤあい: 映画探検家。慶應大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことが契機で、社会問題に関わる映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル(株)に入社。取締役副社長も務める。現在は独立して映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。編著書に『世界を配給する人びと』(春眠舎)。

